



賡作幽霊候補生 Part2

tontokaimo39

賈作幽靈候補生

PART 2

プロローグ

道は思いのほか混んでいた。

「急がなくちゃ」

彼女はいらいらしながら、かなりのスピードで走っていた。

「あっ！」

子どもが一人、車の前に飛び出したのだ、思わず力の限りブレーキを踏みこんだ。

ドン！という大きな音とともに激しい衝撃が襲った、ブレーキで急停車したための衝撃ではない、彼女の意識はそこまでだった：大型のトラックが追突、彼女の車は火を噴いた。

免許証を始め、全ての持ち物は焼失していた。「若い東洋人らしい女性」判ったのはそれだけだった、彼女は、身元不明者として埋葬された。

夕子が消えた、本当に消えたのだ…

私は、待ち合わせの場所で夕子を待っていた、約束の時刻からもう二時間は経っている、携帯を入れてみた、しかし応答がない、いや繋がらないのだ…

二人の約束が直前に取り消しになることは珍しくない、大抵は私の方が緊急の事件で呼び出されるのだが、夕子の都合だったこともたまにはあった、しかし常に連絡は取り合っていた、連絡のないままで一時間以上待たせたことも、また待たされたこともこれまでには一度もなかった。

私は公衆電話を探した、すっかり数が少なくなった公衆電話だがなんとか見つけることができた、しかし呼び出しの音がいつまでも続くだけだった。

翌日も電話は不通だった、淳子と直子に連絡を取ったが、

二人に思い当たることはなかった、大学に行って見たがそこでも判ることも何もなかった、学生の何人かに尋ねたのだが、その日夕子を見かけたという者は一人もいなかった。淳子から携帯が入った、夕子の下宿へ行ったが、彼女が部屋にいる様子はないという。

午後、後見人だった夕子の叔父永井氏と共に、私も夕子の下宿へ向かった、ドアには鍵が掛けられていたが、永井氏が親族を名のって管理人に開けてもらった、「そのうち招待するわ」といいながら、まだ招待されたことのない夕子の部屋だ、が、異状は何もなかった、もしかして書置きでも、という私の期待は空しかった、旅行の際に彼女がいつも持ち歩くバックも、旅行用の靴もきちんと揃えて置いてある、部屋は片付いてはいるが外出のための片付けのようには見えない、いつも整頓しておくのが夕子の性格なの

だろう、永井氏と二人で何度見直しても、行方の手がかりとなるようなものを見つけないことはできなかった。

翌日も翌々日もいやその後も、夕子は姿を見せなかった、淳子や直子に加えてミス研メンバーの全員が、それぞれに手を尽くして彼女を探した、原田も、私には言わないものの、一人で探しまわっていることがよく分かった、課長はその人脈を通して、都内のみならず近隣の県からも情報を集めた、そのころ若い女性の絡む事件も事故もなく、該当するような女性で事故死した者も自殺者もないと言う、それは唯一慰めになったものの、やはり私は不安に苛まされた、夕子が単独で犯人に会い、そのために危機に陥ったことは一度だけではなかったからだ、もし彼女が同じ行動を取ったとしたら：いやあの日は、事件など何もなかった、

だからこそ二人で気楽にデートの約束をしていたのだ…

夕子が消えてから五ヶ月が経過した、相変わらず手がかりらしいものは何一つ見つけれなかった。

「なに夕子のことだ、その内ひよっこり顔を出しますよ」と、叔父の永井氏はのんきそうに言って、夕子の下宿代を払い続けたが、やはり不安を隠しきることはできないようだった。

私は携帯が鳴る度に夕子の声を期待した、しまいには携帯を投げ捨てたくなった、不謹慎ではあるが、事件が多い方がよかった、捜査に夢中になっている間だけは、気を紛らわせることができるのだ。

原田は気を使い、私の前で夕子の名を出すことは決してなかったが、なお彼は彼なりの捜索を一人で続けていた。

「ホワイトマーマードという店を知っているか」

「ああ、名前は聞いたことがありますか」

「社交クラブというのかな、今は何と言うのか知らないが、俺たちの世代の言葉で言えば要するにキャバレーだ、高級クラブということでは有名人も出入りするそうだが、なんのことはない内藤組という暴力団が経営する賭博場だ」

「となると四課ですね」

「四課がもう何度か手入れを行った、五回だと言ったかな、ところが全て空振りだった」

「五回も、そうなるか…」

「そうだ、情報が漏れている、四課は今微妙な立場にたっている、いや四課だけではない、これは警視庁全体の問題だ、しかし内部に情報を漏らすものを抱えた四課はどうしても自由に動けない」

「と、言うとは…」

「一課で内密に探りを入れてくれないか、というのが上からの要請だ、いや命令だな」

「で、それを私に？」

「頼む、原田と、と言いたいところだが：原田もいい刑事だがこう言った仕事には目立ち過ぎる、できる限り顔を知られていない者がいい」

「だとすると岸本ですか？」

「そうだな、二人で頼む、あくまでも内密だ、このことを知っている者は四課では課長だけだ」

「漏洩の方ですか、それとも賭博の尻尾？」

「両方と言いたいところだがまあそれは無理だろう、四課の問題が優先だ」

課長室での会話だった、岸本というのは他県の警察から一

課に配属されて来た若い男、歳は原田と同じ程度と聞いている。

内藤組か、名前は聞いているがほとんど知らない組織だ、暴力団関係は本来四課の仕事だがこの事情では四課に尋ねるわけにはいかない、私は、すでに四課を退職している山口警部のことを思い出した、彼とは課は違うが何度か付き合った、同じ事件を互いの立場から追ったこともあるし、退職後の家を二、三度訪ねたこともある仲だったのだ。

「内藤組だと、どうして一課が？」

「ええ、それはちよつと…」

「分かった、それは聞かないことにしよう、あれは普通の暴力団とは違うんだ、まずどの組織とも組んでいない、内藤組というより内藤一家だな、暴力団がやるような脅しなどはしない、係争ごとに顔を出すようなこともしない、

むろん麻薬を扱ったり売春組織を操ったりということもない、要するに表に顔を出すことは何もやらないんだ、だから事件を起こしても、それが暴力団絡みだとは普通の者には気づかない」

「では何で組織の維持を？」

「賭博一筋、その賭博場がホワイトマーメイドだな、高級社交クラブで通っているが、裏では一晩で億に達する金を動かしている、やや昔風で親分子分の結びつきは強く、それだけに組織内は団結している、ただし勘違いするな、凶暴な組織であることに変わりはない、組織に関することとなれば殺人などは朝飯前だ」

「それじゃあ敵も多いでしょうね？」

「いやそうでもない、賭博以外、組織暴力団がやるようなことをしないからな、あのあたりを縄張りに行っている組と

も、持ちつ持たれつでうまくやっている、ただ関上組と言
う同じような組織があつて、こことは犬猿の仲だ、殺人事
件などを起こすのは大抵そことのいざこざからだ」

私は、岸本と二人でホワイトマーメイドの客になつた、
広い部屋の中は丸いテーブルが並びそれぞれのテーブル
には椅子が五脚、テーブルの数は二十個程度だろうか、な
るほど高級クラブといわれるだけに、テーブルも椅子も、
床や壁も驚くほどの豪華な造りだ、正面にはシヨアの舞台
があり、私たちは後方だが舞台の正面に位置する席に案内
された、まだ隅のテーブルは空いている、うまい客扱いだ、
初めての客だからと隅に押しやっつては顧客とは成り得な
いだらう、飲み物の注文を取つたウェイターが去ると、す
ぐ一人のホステスが椅子に座る。

「初めての方ね、私、奈緒美といいます、よろしく」と話かけたが、彼女は新しい客が入るとすぐその方へ行ってしまった、客席は全体として暗いが、それぞれのテーブルには小さなライトが燈っている。

全てのテーブルが埋まったところ、舞台のショーが始まった、最初は一人の女性の歌、続いてほぼ半裸の女性が二人、踊りながら歌う、

「・・・ペッパー刑事よ！」
以前流行ったピンクレディーの歌だ。

「皆様よくいらっしやいました、素晴らしい今宵のひと時をどうか心行くまでお楽しみください、続きましてダン佐藤のマジックショー！」

司会者の言葉に続いてマジックショーが始まったとき、舞台左手の奥から一人の着物姿の女性が現れた、近くのテ-

ブルに向かうと、何か言葉をかけて頭を下げ、すぐ隣のテーブルへ向かう、彼女はそれぞれの席の客に挨拶をして回っているのだ、やがて顔の分かったころまで近づいた彼女を見て、私は、思わず上げそうになった声をかろうじて押さえた。

「ゆ、夕子だ！」

彼女は私たちのテーブルへ来た

「初めてのお方ですね、ようこそ、私は内藤京子と申します、お名前お聞きしてもよろしいでしょうか？」

「あ、う、うん」

「こちらは山野さん会社の私の上司です、私は根岸です」私が詰まったのを見て岸本が答える、彼は夕子のことを何も知らない、私が、一人で打ち合わせていた偽名を忘れたとでも思ったのだろう。

「山野様と根岸様ですね、今後ともよろしく」

彼女は呆然としている私を残して隣の席に移った。

彼女が全ての席を回ったところマジックショーの幕が閉じた、次いで幕が揚がるとピアノの横にピアニストらしい男が現れ、司会者が一段と声を張り上げる。

「お待ちせしました、今宵も京子嬢の素晴らしい歌声をお贈りします」

京子と名のつた女性は、挨拶を終えた右手からそのまま静かに舞台上上がった、ピアニストに何かをささやき、司会者にも何かを告げると、舞台の中央に据えられたマイクの前に立つ、拍手が一斉に起こる、

「お贈りします歌は、君に会いし夕べ」

司会者の言葉が終わると、女性はピアノの伴奏をバックに

マイクを手にとって歌い始める、私の知らない英語の歌だ、しかしうまい！夕子が歌うのを聞いたことはなかったが、まで…この声は…夕子、そう確かに夕子の声だ！

一曲が終わり、盛大な拍手が消えると司会者が再び口を開く、

「続きまして、すばらしい今宵のために、モスクワ郊外の夕べ」

今度は日本語の歌詞、これは私も聞いたことのあるメロディ、そうだ名前は忘れたが、これを歌っていたプロの歌手もいたはずだが…

拍手と共に京子が舞台から去ったとき、最初に現れた奈緒美という女性がまた私たちの席に座った

「どう？一目惚れでしょう、初めての人はみなそうなのよ」

「あの人は、いったいどう言う人なんだ？」

と、岸本の方が先に口を開く

「私たちのボスよ」

「ボス！？」

「この店のオーナーなのよね」

「オーナーだと！オーナーが舞台に立つのか？」

「あの方自身の希望よ、でも上手でしょう、もとは歌手だったのかしら、今日もお客さんの中にはプロの歌手も来てるのよ、でもあれではプロの方が顔負けね」

「いつも歌うのかい？」

「ええそう、大人気、男性のお客さんの半分はボスの歌を聞くのが目的と見ていいほどね、今日の歌は初めて聞く歌だったけど、でも貴方たちについてるわよ、ボスが二曲歌うことはめったにないの、いつもは一曲だけね」

「君はいつからここに勤めているんだ？」
と私が聞いた

「そうね、まだ新米、三ヶ月ほど前からよ」

その夜私の頭の中は混乱の極みだった、ホワイトマーマードに行ったのは仕事のためだ、だからアルコールは疑われない程度にしか飲んでいない、それでいてまるで酔っ払いの気分だ、彼女は夕子だ、夕子に違いない、夕子が思わぬ特技を披露して驚かせたのは一度や二度ではない、彼女は車の構造に詳しく、犯人の車に巧みな仕掛けを施したこともある、鍵のかかったドアを開けるといふ妙な技も持っている：だから歌が歌えても不思議ではない、英語ができて：そう彼女は大学生なのだ。

しかし彼女は京子と名のり、私に気づいた様子はなかつ

た、なぜだ？記憶喪失という言葉が浮かんだ、もしかして記憶喪失…だがそうだとしてもなぜ内藤京子なんだ、なぜ内藤組という犯罪組織のボスなんだ？

眠れなくて何本目かのタバコに手を伸ばしたとき、ふと奈緒美といった女性の言葉が浮かんだ、「ボスが二曲歌うことはめつたにないの」…うん？二曲か…君に会いし夕べとモスクワ郊外の夕べだったな…夕べ…

二日後、私と岸本は再びホワイトマーメイドの客となった、私は次の日にすぐと焦ったのだが、捜査の作戦上そうしたのだ、京子は、また客への挨拶を繰り返し、やがて二人の席へ来た

「たしか山野様と根岸様でしたわね、またおいでくださいましてうれしいですわ」

私は思い切ってボールを投げ返した

「モスクワ郊外の夕べをもう一度歌ってもらえないか？」
彼女はなにも答えなかったが、その口元がわずかにほころんだ、夕子だ！それはお客相手のほほえみではない！うれしい時のいつもの夕子の顔だ！そうか、夕子は私に気づかなかったのでも、無視したのでもない、「私は夕子よ」と、歌のボールを投げて来ていたのだ！その日、夕子は再びモスクワ郊外の夕べを歌った。

次の日から、私は一人でホワイトマーメイドを見張った、二人よりも単独行動の方が効果的だと岸本を言いくるめたのは気が引けるが、夕子を追うのは本来の職務ではない、そこに岸本を引き込むことはできなかったからだ。

夕子はホワイトマーメイドで暮らしていることがわか

った、そして何度か外出した、一度は美容院一度はプチツク、ところがいつも三人の男が付き添っている、おそらく夕子の護衛だろう、くそ！あの男たちがいなければ夕子と直接話すことができるのだが：夕子に本名を明かせない事情がある以上、うかつに声をかけることはできない：

そうしたある日、夕子の乗った車は都内を離れた、私は当然その後をつけた、あたりはだんだんと田舎の風景に変わっていく

「うん？」

別の車に気付いたのだ、俺をつけているのか？私は脇道に逸れた、つけて来た車は私を無視してそのまま直進する、

「やはりそうか」

私をつけているのではない、夕子たちの後をつけているのだ。

人家が途絶えて道は林の中に入った、と、突然つけていた車がスピードを上げ、夕子たちに追い付こうとする、私は一瞬迷った、私もスピードを上げれば、ただの車でないことがばれてしまう、いやかまわない夕子たちは狙われている、この判断の迷いが私の運転を誤らせた、右にカーブするところで、私は藪の中に突っ込んでしまったのだ、その時、銃声が響いた、二発、三発、私は車を飛び出してカーブの先を覗いた、前方に夕子たちの車が見えた、私の車と同じように、しかし左側の藪に突っ込んでいる、つけていた車は、追い抜きざまに夕子たちを撃つたのだ、

「夕子！」

私は駆けだそうとして足を止めた、車のドアが開いて男たちが降りてきた、続いて夕子も、夕子は無事だったのだ。男たちはタイヤの交換を始めた、銃弾の一つが当たったの

だろう、彼らが私に気づいた様子はない、私はすぐに自分の車に戻った、ところがエンジンがかからない、苦勞してなんとか車を道に戻した時、もう夕子たちはいなかった。

「お嬢さん、やつは値上げを要求しているんです」

「そう、いくらぐらい？」

「ちよっと都合ができたから、いつもと別に十万円ほど欲しいと」

「十万円ね、わかったわ、岩本と相談して明日返事をすると言っておいて、そうね、ことによるともう少し色をつけてもかまわないって、ただ岩本には明日の三時まで会えないから返事はそれ以後になるって」

「わかりました、そう伝えておきます」

「でもね、警察はいつまでもバカじゃないわよ、もう情報

が漏れていることに気づいているはず、もし四課が情報以外の日に動いたら…」

「その心配はないと思います、彼なら四課の動きに気づかないことはまずないでしょう」

「そう、そうならいいけど…」

「ねえ犬上、さっきの三上の話どう思う？」

「十万円余分に出せですか、欲張りな奴」

「いやそのことじゃあないの、三上よ、突然十万円」

「突然十万円ですか…あつ、まさかあいつ！」

「心配ないと思うけど…あなた情報を漏らしてる人知ってる？」

「知りません」

「そうよね、あなたも知らない私も知らない、岩本も雉尾

も、知っているのは三上ただ一人、そうしているのが組を守るための仕組みなんだけど……」

「そうかお嬢さん、三上の奴だれも知らないのだから勝手なことができる……あいつそうしたら今までも」

「大丈夫だとは思うけど……」

「分かりましたお嬢さん、あいつ本当にデカに会うかどうか、これから後をつけて見ます」

「こっそりよ、変な騒ぎを起こさないようにね」

「犬上ですお嬢さん、三上は確かにデカに会っています心配はなかったです」

「そうよかった、で、あなた今どこにいるの」

「〇〇駅の、えーと、フラワーという喫茶店、三上もデカもまだ中にいます」

「そう、もういいわ、早く帰って来て」

私はまたホワイトマーメイドの席に着いていた、夕子がまた挨拶にやってくる、

「あっ」

と言う小さな悲鳴、彼女は、席の前で足をすべらせ倒れそうになった、私は慌てて彼女を抱き起こそうとしたが、

「あ痛！」

突然立ち上がったためにテーブルに足をぶつけてしまったのだ、ビールがこぼれ、すぐ給仕が飛んで来る。

「まあ、大変な失礼をしてしまいました、ごめんなさい、いつも和服なのに気まぐれでこんなドレスを着てしまい、裾に足が絡まったの、本当にごめんなさいね」

夕子は何度も頭を下げて、この様子を心配そうに見ていた

隣の席に移る。

「大丈夫ですか、私たちはいいんですよ」

といいながら岸本が彼女をサポートする、私は大丈夫ではない、ぶつけた足が痛くてたまらなかったのだが、こぶしをしつかりと握って耐えた、そのこぶしの中には夕子がさつと握らせた紙が入っているのだ。

翌日、私は淳子を呼び出した。

「悪いけど頼みたいことがあるんだ」

「何宇野さんの頼みって？夕子のこと？」

「そうじゃないんだが…」

「夕子、分かったの？」

「いや…」

「そう…、じゃあ私に夕子の代わりをさせようと言うの

ね」

「嫌かい」

「嫌な分けないでしょ、夕子の大事な旦那の頼み、ことわつたら夕子に一生恨まれる、たとえ胃の中味噌の中」

「おいおい、でまじめな話、JR〇〇駅の近くにフラワーという喫茶店がある、そこへいて、この写真の男が現れるかどうかをそつと確かめてもらいたいんだ、今日午後三時から七時の間、実は署の者はどうしても顔を出せない事情があつて、それに外からの張り込みには場所が悪いんだ」

「ふうん、特徴のある人ね、これなら間違えないわ」

「少し時間がかかるから、恋人を用意しておくよ、女性一人いや男性一人でも四時間はねばれないだろう、だからカップルで頼む、岸本という刑事だ、彼は一課に入ったばかりだから他の課にはまだ顔を知られていないはずなんだ、

まあ念のため眼鏡をかけて行けと言っておく」

「ということは、この写真の男警察関係者ね」

「鋭いな、実はそうなんだ、危険はまずないが、刑事なら心強いだろう、早く現れたらその時点で携帯を頼む、七時になっても来なかったら帰ってくれていい」

「で、その岸本さんって独身なの？」

「うん、歳は原田と同じぐらいだな」

「よし、そのお見合い引き受けた、ところで宇野さん、私、

別のことで夕子の代わりになれない？」

「ええっ！おいおい、そんなことをしたら、俺は一生夕子に呪われる」

「そら引っかかった、その口ぶりでは、やはり夕子のこと何か分かってるのでしょうか」

「頼みながら嘘は言えないな、夕子は無事だ、だが詳しい

ことはもう少し待ってくれ、それからこれは絶対に内緒だ、」

「そう！夕子無事なのね！了解！警部殿」

夕子からそっと渡された紙には、次のように書かれていた。

提供者、四の二番、但し要確認、明日三時以降JR

〇〇駅近辺喫茶店フラワーに出現

大きな魚が釣れる日、薄荷の歌の二日後、十時より

五時過ぎに淳子から携帯が入った

「来たわよ、間違いなし」

「そうか、ありがとう、岸本は？」

「いるわよ、これからね、どこかへ行きましようかと誘惑し

ているところ」

「ちよつと岸本へ代わつてくれ、岸本か、淳子嬢とどこに行こうが勝手だがホワイトマーメイドだけは絶対に行くなよ」

次いで私は課長に会い、課長は長官と四課の課長の出席を要請した。

その日、夕子たちは再び田舎へ向かった、そしてまた別の車が後をつけている、車種も色も違うが、夕子たちを襲撃した連中に違いない、こうなったら原田やパトカーの出勤をとも考えたが、夕子にはまだ三人の男が付き添っているのだ、うっかり手出しをすると何が起こるか分からない、仕方なく私はまた一人で後を追った。

今度は襲撃はなかった、かなりの距離を走った後、車が

止まった、私も離れて停車し、こっそりと車に近づいた、車内には誰もいない、が、先を見ると男が三人、一軒の家の前で中の様子を窺がっている、私は林に入り、家の裏側に出た、大きな家ではない、造りから見ると別荘のようだ、こっそりと窓から覗くと、例の夕子に付きまといっている男たちが見えた、彼らも銃を抜き、玄関の土間から外の様子を窺がっている。

夕子は？と見ると彼女は部屋にいた、そっと窓をたたき、一瞬驚いたようだったが、すぐにうなずいて隣部屋に移る、隣部屋の窓から抜け出したのだ、二人で林に入る、襲撃者の車にキーが付いている、夕子が助手席に座ったところで発進、その時何発かの銃声が響いた。

くそ！追ってくる、夕子が乗っていた車だ、ということのはあの三人だろう、夕子の車はスポーツタイプ、こっちは

普通のセダんだ、すぐ追い付かれるだろう、銃弾が後部のガラスを砕いた、

「夕子、伏せていろ！」

私は脇道に入った、そこで私は気が付いた、この道は何度か走ったことがあるぞ、ある事件の捜査で地元警察の応援をした時だ、しまった！

「夕子！この先は崖だ！崖の手前でスピードを落とす、その時飛び降りるんだ！ドアを開けておけ！」

「今だ！」

私はブレーキを踏み、その瞬間に飛び出して草むらに転がった、夕子が飛び降りたのも目の端に捕えていた、車はそのまま崖の下に落ちて行った、続いてもう一台の車が、これは猛スピードのまま崖下へ…

「夕子！」

夕子が立ち上がった、私は夕子の方へ駆け寄った、夕子もまた私の方へ：そこで二人はがちりと抱き合って：いや、この感動の場面は実現しなかった、草むらから男が一人立ち上がったのだ。

「あっ！雉尾！助かったのね！」

拳銃を構えた私に向かって、夕子が叫んだ、

「待って！この人は私の味方！」

襲撃者の三人は、家の前で伸びていた、ボクサー上がり
の犬上が叩き伸ばしたのだと言う、私の乗って来た車も無
事だった、地元警察を呼び出して、事故のことを伝えた後
に警視庁に向かった、

「なぜあんなに追って来たんだ、拳銃まで撃って来て」

「警部さんが運転だとは知らなかったのですよ、関上の車
ですからね、夕子さんを奪われたと思って、拳銃は夕子さ

んが乗っているから本当には使えない、犬上が撃ったのですがタイヤを狙ったのが」

「でも雉尾、よく助かったわね」

「貴方たちの飛び降りるところがちらりと見えました、そこで同じことをしたのです、私は運転をしていたのです、それでなかったらだめだったでしょう」

「改めて紹介するわ、この人ね、雉尾啓一さん」

「雉尾です、私は内藤組に入っていますが、実は弟の仇を取るためだったのです、弟は内藤組の誰かに殺されました、そのために犯人を捜し、内藤組の悪事を調べて世間に公表してやろうと思っていたのです、しかし内藤組のガードは実に固い、五年間も組にいて幹部の一人にまでなったのですが、弟を殺した犯人はおろか、公表できるような悪事の

証拠も何一つ見つからない……」

「それが内藤組の仕組みなのよ、一人が逮捕されても、そのために他の組員や組に影響が及ぶことがない仕組み、例えば恭一に教えた警察の捜査情報の提供者ね、彼が誰なのか誰も知らない、この雉尾さんも、私も、私は偽者だから本当のトップに当たる岩本さえも知らない、知っているのは直接連絡している三上という男だけ、だから岩本が逮捕されても、ばれる恐れはないと言うわけね、これだと提供者の方も安心していられるし、もちろん全てがそうだと組織は動かないから、幹部はある程度いろいなることを知ってるわ、でも知らないで済むことは知らないままできると言うのが組の原則よ」

「しかし夕子さんは凄い、たった一週間で私は本当の組員でないと思破ったのですから、もちろん私は、内藤京子だ

と思ってるでしょう、もうこれまでだと覚悟したのです、ところが夕子さん意地悪なんですね、見破っていながら知らない振り続けている、何時ばらされるかと本当にひやひやしていました。」

「あらそれは違うわ、こっちだって命がかかっていたのよ、だから貴方が本当に信用できる人だと分かるまで正体を明かすわけにはいかなかったの」

「すみません、そうですね、しかし夕子親分は凄い、本当のボスとして立派に采配をふるっていたのですから、このまま親分を続ければ組はもっと発展しますよ」

「アメリカ帰りと、組独特の秘密主義に助けられたのよ、ちぐはぐなことと言っても、それは知らなくて当然だ、間違ってもおかしくはないと思ってもらえるでしょう、でなかつたらすぐ正体がばれていたわ」

「おいおい、二人して変な組織を発展させるなよ、それより夕子、どういうわけで内藤京子になったんだ？」

「そうね、それから話さない」と

夕子は一人、空港近くの道を歩いていた。時々発着する航空機の音はうるさいが、天気もよく、あたりの広々とした野原を眺めていると何となく気持ちがいい、

「海外か、留学するかもと言った時、恭一かなりショックのようだったわ…」

その時、後ろから走って来た車が突然止まった、すぐに数人の男がばらばらと飛び降りて夕子を取り囲んだのだ、

「何ですか！」

「何でもいい、おとなしく乗れ」

「嫌よ！」

「ぐずぐず言うな！さっさと乗れ！」

拳銃だ、夕子ならそれは玩具でないことがすぐ分かる、彼女は仕方なく車に乗った。

「ボス、うまく行きました」

「ほう、お前が内藤の娘か」

「どうします、すぐ始末しましょうか？」

「いや待て、こいつが俺たちのことをどこまで知っているか聞いてからだ、それに奴らのことも聞き出せる、待てよ人質として使えばもっと役立つぜ」

「じゃあどうしましょう」

「縛って隣の部屋にでも放り込んでおけ、ほう可愛い顔をしてるじゃないか、いいか誰もおかしな手出しをするな、もしやったら絶対に許さんぞ！」

「というわけよ、初めは何が何だか分からなかったわ、で隣室に転がされていて聞き耳を立てていると次のようなことだけは分かったの、私は内藤京子という女性に間違われてること、その女性は彼らにとってかなり困る秘密を知っているらしい、そのために彼女の口を塞ぐのがもともとの目的、そして人違いだと分かったら私も殺されるに違いないということね、身元の分かるもの持ってなくてよかった、携帯持ってたけど車に乗せられるときに落としたの、ところが一人の男が踏みつけてしまった、あれはついてたわ。後で知ったのだけど、そこが関上組の事務所だったわけ。」

「夜になって、また車に乗せられた、『俺の屋敷に連れて行け』というボスの命令よ、途中後ろから来た車が追突

し、運転手が降りて怒ってる間に、私はそばによって来た別の車へ、あの作戦見事だったわね、犬上凄かった、私と一緒に乗っていた二人の男を二発で殴り倒したのだから、もちろんその時の私は何が起きたのかわからない、『お帰りなさい、お嬢さん』には驚いたわ」

「そこからは私がお話した方がいいでしょう、アメリカで暮らしていたボスの内藤剛三が現地で亡くなったのです、そこで娘の内藤京子が帰国することになった、空港へ迎えに行ったのですが、京子は予定の便から現れない、困っている時に『関上組が若い女性を拉致したようだ』という情報が入ったのです、そこで関上のところを見張っていたわけですね、うまく救い出すことができたと思な喜んでいました、もちろん私も内藤京子だろうと思っていたのですが、京子の写真と夕子さんの顔はそっくりなんです」

「突然お嬢さんだのボスだのと言われて途惑ったけど、やはり間違いがばれると危ないということには変りはなかったわ、だから私は内藤京子で通したの」

「なるほど、しかし本物が帰ってきたらどうする気だったんだ」

「その時はその時、なんとかなるわと：正直に言うとそのれが一番心配だったの、で、雉尾さんの正体が分かってからアメリカに行ってもらったのよ」

「確実なことは分からなかったのですが、むこうの空港近くで自動車事故があったことを知りました、ちょうど京子が飛行機に乗るはずだった日、車は燃えあがつて身元も何も分からないまま処理されたということですが、亡くなったのは東洋系の若い女性だとのこと、日時と場所、それに東洋系の若い女性ということから、彼女こそ内藤京子だっ

たのではないかと判断したのです」

「そうか、関上組はなぜ執拗に京子を狙ったのだ」

内藤剛三は、敵対する関上組のアメリカにおける犯罪を調べ上げその証拠も握っていたのです、関上組にとってそれが明るみになることは、日本での犯罪と比較にならないほど打撃の大きなものだったらしい、剛三は亡くなる前にそれを娘の京子に教えたということが、関上側に伝わっていたのです」

「もう一つ、お前たち今日あそこで何をするつもりだったんだ」

「あの家ね、内藤の別荘なの、あ、その前に、本当にひやりとすることが起こったのよ、内藤剛三と親しくて京子も知っているというアメリカ人がやって来たの」

「幸い京子を知っているといても彼女に一度お茶の接

待を受けた程度だったのね、私が京子に似ているので気づかれずに済んだのだけど、剛三が京子に話したという関上組の秘密ね、本当はその米国人が文書にして私たちに送ったはずだというのよ、危険な情報を娘に話すなんて変だと思ってたのだけど、その通りだったわけ」

「そこで夕子さんが来る前からの文書を調べたのですが、そんなものは見当たらない、よく問い正すと、送るとき書いた住所がああ別荘宛だったと分かったのです」

「それで取りに行ったわけ、一度は関上に襲われ、エンジンの不調で引き帰したけど、今度は見つけた、これよ、これで私を拉致した関上に仇が取れるわ」

「関上組が後をつけているのを知らなかったのか」

「知ってたわよ、今度は襲って来ないようだから、最後までついて来させて一気に片付けてやるうって」

「乱暴だな！」

「犬上の提案ね、私も賛成したけど、犬上、さすがお嬢さんと喜んでた」

「あきれた、で俺のことは？」

「恭一には気づかなかったわ、予想はしてたのだけど、」

「夕子、今日警察が搜索することを知ってるだろう、夕子が今日がいいと教えてくれたんだぜ、それでお前たち四人で逃げ出したのかと思った」

「バカ、どうして私が逃げなくちゃならないの、手入れがあるから行ったの、知ってたのはもちろん私だけだけど、あの別荘は前から四課に知られてるの、明日にでも続けてあそこが調べられ、文書が押収されてしまったらもう目に触れることができなくなるでしょう、だからその前にね、私が変な目にあっただのはこの文書のためでしょう、一歩間

違つてたら私は殺されてたかも分からないのよ、だから絶対
対に私の目で見ておきたかったの、恭一が私だけを連れ出
さなければ、四人ともそろつて店に帰つてたわ、そこで当
局の搜索の結果、私もめでたく逮捕される予定だったの」

その夜十時、ホワイトマーメイドは大掛かりな搜索を受
け、大きな魚が多数網にかかった。カジノは毎夜開かれて
いたが、ペッパー刑事の歌が大物参加者へのサイン、この
歌が歌われるとその二日後、彼らが参加するより大掛かり
なカジノを開くということだったのだ。

夕子が別荘から持ち帰った書類によって、関上組も搜索
を受けた、書類の内容は関上組をつぶすのに充分なものだ
った。

夕子と二人だけの夜、半年振りだ。明日は淳子や直子、ミス研のメンバー、それに原田や課長、夕子の叔父永井氏も加わって、夕子帰還パーティが開かれる、夕子の無事を知った直子は、本当の小学生のようにぴよんぴよんと飛び上がって喜んだと言う。

「みんな本当に心配したぜ」

「そうでしょうね、それを思うとつらいわ、一日でも早くみんなに連絡したかったの、それが出来なくて…」

「仕方がなかったんだろう」

「昼の私は桃太郎、夜になってもこの携帯」

「桃太郎、なんだそれ？」

「ほら犬猿雉のお供つき、犬上と猿沢、雉尾よ」

「ああ、あの三人か」

「雉尾はともかく後の二人の、女性専用の美容院でも平気

で入って私の頭のセットを眺めてるの、他の客が怖がって逃げ帰るから、店には迷惑料よ」

「どんなことがあっても夕子を守ろうとしたんだな」

「そう、それにあの二人結構面白かったの、それだけに可愛そうなことに…」

「夕子の責任ではないさ、一人で逃げようとしたのは俺の判断だ、銃の撃ち合いが始まろうという中に夕子を置いておくわけにはいけないと思った、それに崖の道に入り込んだのも…」

「恭一のせいでもないわ、私も応じたのよ」

「ああそれからこの携帯ね、特定の者でなければ通信できないの、だから一人になっても連絡できなかつたの、普通電話はどこにもないし」

「そんなもの持たされてたのか」

「私だけが持たされてたのじゃないの組員全員よ、ショーや接客の女性たちね、ファンがつくのは嬉しいのだけど、中にストーリーカーのような客がいるの、だから彼女らの携帯は客とは通信できない仕組み、組員は必要な組員どうしだけ、私のは幹部用だから組員となら誰とでも繋がるの、でも外部とはだめ、これは万一の逮捕され解析されても、客の大物の名を知られないようにするためね、客との連絡が必要な時は全て直接口頭で行うの、京子の父親剛三が考えたことだって、携帯はみな改造機というわけ」

「ふうん、そこまで秘密主義だったのか」

「舞台に立ったのも、客に挨拶して回ったのも、なんとか外部へ連絡するチャンスはないかと思つてのことよ、四課が客の振りをして偵察に来ていることは何度かあつたわ、ところが四課には情報提供者がいるのでしよう、うかつな

ことはできないし、一課が、それも恭一が来るなんて夢にも思わなかった」

「夕子を見た時は本当に驚いたぜ」

「私も驚いたわ」

「歌のサイン、あれよく思いついたな」

「私はウインクの一つもしないような誰かとは違うわよ、でも苦肉の策ね、恭一気づくかなと少し心配だったけど」

「あっそうだ、淳子があ秘密の連絡『要確認』のために働いてくれた、『私に夕子の代わりをさせるの』と言うから怒ったのかと思ったら『やるやる！どぶの中に入れても』いや、味噌だったか…ところがその後だ『私別のことだ夕子の代わりにしてもらえない？』だとさ」

「え、淳子そんなこと言ったの？」

「ハハハ、引っかけさ、見事引っかけられて夕子は無事だ

と白状させられた、それを聞いて彼女も喜んだぜ」

「フフ、淳子もやるな」

「彼女、その時紹介した岸本という刑事と、今はいい雰囲気だ」

「そう、淳子にも蓋ができたのね」

「何だそれ？」

「フフ淳子に聞いて」

「淳子に直子、みんないいやつだな…だが何と云っても夕子が最高だ！」

そう云って私は夕子を抱きしめた、夕子は小声で

「ただいま、恭一！」

私も小声で応えた

「お帰り、夕子！」

エピローグ

「お嬢さんお久しぶりです」

「えっ、犬上！猿沢も！貴方たち無事だったの！」

「スピードを出し過ぎていたのがよかったです、崖下の岩場を飛び越えその先の林の大木に引っかかって」

「帰ってみるとみんな捕まっている、二人だけで逃げるのは悪いなと自首したのですが、不起訴になりました」

「お嬢さんの恋人宇野警部さんのおかげです、俺たちはお嬢さんを守るために働いたのだと言ってくれて」

「恭一、私にだまってそんなことをしてたの…でも私のことももう分かっているでしょう」

「はい、それから雉尾のことも、だがお嬢さんはやっぱり俺たちのお嬢さん、ボスです」

「お嬢さん、いっしょに永井組をつくりましょう」

あとがき

「探し求めた恋人の女性にやっと再会、ところがなぜか女性には知らぬ顔……」これはミステリーの一つの「テーマです、海外のものですが、同じテーマの作品を三冊読みました、そのうち二冊の女性は賢いのです、知らない振りをしてながら「貴方が分からないのではないの」と言うサインを、周囲に気づかれないようそつと示すのですね。夕子ファンとして、夕子がこの二人の女性に負けているのは嫌だった、これがこの駄作を書いた目的なのですが……

事件より説明部分のみだらだら長くなってしまいました。宇野が夕子を抱きしめたあとの会話は、あるコミックのパクリです、で全体は、セ…….のですよね。

ここに登場する人物の名前は全て架空のもので、万一同名の方がいても、何ら関係ありません。

鷹作幽霊候補生 Part2

<http://p.booklog.jp/book/71601>

著者 : tontokaimo39

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/tontokaimo39/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/71601>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/71601>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパバー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ